

我が世の幸と耳うてば

天のさゝやき靜なるか那

暮 秋

東 くめ子

人まつ虫の音

いつしかたえはて

招きし尾花の

袖さへ破れぬ

暮れ行く秋を

といめんすべさへ

しら露おさそふ

庭の面さびしや

賤の女

敏

子

いつとも同じ

文明の

光くまなき

御世なれば

都に遠く

へだつとも

まなぶに難さ

事やある

何かなげかん

山青く

水清らけき

海原の

四十

岩にくでくる

波のはな

ちりては結ふ

月かけの

あかぬながめを

朝夕に

友とたのみて

むらさきの

心の限り

學ばいや

心のかぎり

學ばいや

歌の曲

つねを

うつり行く世の

ならはせか

素樸のころ

かのづから

清きおもひに

慰藉の

それもしばしの

夢のまや

かすかに響く

あかとき

天使のこと葉に

目さむれば

つれなき縁りの

いく年か

過ぎて果敢なし

人の夢

優しくかしてき

あつきなさけの

同情の涙

袖のおもりし

まごころの

永劫と

あふれては

こともありしか

月に向ひて

虫鳥の音に

世の幸ち人の

我れにはつらさ

はなに酔ふ

あこがれて

さはげども

歌の曲

勇ましき若武者

落

譯

一、誰か敢て此深淵に潜り入る者ぞ、朕は金盃を投げ捨てたり、黒き淵は早やそを鵜呑にしたり誰か朕に彼盃を致すものぞ、わらば盃は以て其者に與へむ。

二、王はかく語りも終へず果しなき大海に突出

し峻峭崎嶇たる絶壁の頂より、其金盃を渦まける洪濤の中に投げこみて、再び問ひけらく、……誰か敢て此深淵に躍り入る者ぞ。

三、王の前左、騎士若武者の面々、聞き終りて森として水をうつたる如く、唯暴れにわれし大海を蹴し居るものゝみ、誰あつて其任に當らむとする者はあらざりき。王は三たび問ひ給ひぬ、一人奮起するものもなきか、と。

四、されど並み居る人々依然として隻語を發する者もなし、此躊躇せる若武者の一群の中、思ひさや静々と大膽に歩み出でたる一人の年少武者のあらむとは、彼は早や帶を解き上衣を脱ぎ去りぬ、山なす扈從の面々さては貴女貴婦人など、一切の驚奇の視線は、此花やかなる若武者の上に注がれぬ。